

ソーシャル系大学参加者の学習の傾向の分析

前田 仁

近年、「ソーシャル系大学」と呼ばれる形態の社会教育事業が見受けられるようになった。これは、2006年に活動を開始したシブヤ大学を始めとする、市民団体やボランティアが運営主体を担う活動を指す。シブヤ大学及びその姉妹校については先行調査が行われてきた。しかし、それ以外の組織を対象とした調査は行われていない。そこで本研究では、まずシブヤ大学およびその姉妹校に対する調査を行いソーシャル系大学の定義付けを行った。その上でソーシャル系大学の運営の実態調査と参加者の学習の傾向の分析を行い、今後の社会教育事業の展開に有用な要素を明らかにすることを研究目的とする。

調査対象を決定するための予備調査では、京都カラスマ大学の学長に対してインタビュー調査を、その他のシブヤ大学姉妹校に対しては Web ページの調査を行った。その結果、「授業料が実費以外無料である」「運営の主体が NPO 法人か市民団体である」「Web ページ上で参加登録を行っている」の 3 件を定義とした。

本調査 1 では定義に基づき選定した組織に対して、運営に関する実態調査を行った。その結果、対象であった 19 校のうち 7 校から回答を得た。運営組織の構成については、概ねがボランティアスタッフで、デザイン担当や Web ページ構成担当、授業企画担当など専門性を有するスタッフの存在も見受けられた。組織は寄付金や運営団体の事業収入により賄われており、運営の大部分を行政に依頼する傾向は見られなかった。授業については、企画を担当するスタッフが学びたいことを第一に企画され、参加者が継続して学習を行えるような意図もされていた。講師は比較的安価な謝礼で依頼をされており、低コストでの運営に寄与する要因の一つであることが推測された。

本調査 2 では「福岡テンジン大学」と「奈良ひとまち大学」の参加者計 6,606 に、4 件法を用いたアンケート調査を行い、有効回答 85 件を得た。「これまで知らなかった事柄について学びたいから」「学びたいものが授業にあったから」「自分を高めたいから」が学習動機としての割合が特に高かった。また、参加動機・学習に関する考え方・周囲の環境を説明変数、「積極的関与」「継続意思」を目的変数として重回帰分析を行った結果、「積極的関与」には「学習意欲は高い方だ」「無料だったから」「学習する環境が整っている」の組み合わせで、「継続意思」には「学習意欲は高い方だ」「学んだことを役立てる場がある」「地域や趣味の活動、ボランティア、サークル等に積極的に参加している」「初期申し込み時期」「学習することは好きである」の組み合わせで、決定係数に高い値が見られた。ソーシャル系大学の特徴として、比較的若い参加者が集まり、負担のかかりにくい形での緩やかな学習の継続と、コミュニティの形成が可能な場であるということが明らかになった。この環境において、地域の課題解決が可能な人材が育成されていくことが期待される。

(指導教員 逸村裕)